

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00493

研究課題名（和文）ゴルドーニの演劇作品およびオペラ台本に見られる伝統と革新

研究課題名（英文）Tradition and Innovation in Goldoni's Theatrical Works and Opera Librettos

研究代表者

大崎 さやの (Osaki, Sayano)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：80646513

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：過去のゴルドーニ研究においては、ゴルドーニ作品の持つ革新性についてのみ論じられることが多かった。本研究では、彼の作品に革新的な要素だけでなく、伝統的な要素も見られないかを探った。その結果、ゴルドーニは作品の主題、内容、文体、典拠とする資料と、各部分で伝統的な要素と革新的な要素を混ぜ合わせながら、個々の作品、あるいは自身の作品全体をバランスの良いものとする工夫を惜しまなかったことが分かった。伝統的な要素と革新的な要素をバランス良く取り込むことで、作品を観客に受け入れられやすいものとし、幅広い人々を引きつけて、上演を成功に導いていたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、ゴルドーニ作品に見られる伝統的要素と革新的要素を、主題や内容のみならず、文体や典拠資料と、さまざまな方面からアプローチすることで、多岐に渡って分析するという、新たな研究手法を提示できた。社会的には、ゴルドーニの演劇改革を論じたおそらく日本初の単著『啓蒙期イタリアの演劇改革—ゴルドーニの場合』（東京藝術大学出版会、2022年）の出版によりAICT演劇評論賞と河竹賞奨励賞を受賞することで、イタリア演劇を日本社会に認知してもらうきっかけを作れた。また2023年出版の共編著『バロック・オペラとギリシア古典』（論創社）で18世紀オペラに見られる古典の影響に関する研究成果を社会に還元できた。

研究成果の概要（英文）：Past studies of Goldoni's work have often discussed only the innovative nature of his work. In this study, I explored whether there are traditional as well as innovative elements in Goldoni's works. The results show that Goldoni was careful to balance his individual works and his work as a whole, mixing traditional and innovative elements in each section of his works, including subject matter, content, style, and source material. By incorporating a balance of traditional and innovative elements, he made his works accessible to audiences and attracted a wide range of people, leading to the success of his productions.

研究分野：イタリア文学

キーワード：イタリア オペラ 演劇 ゴルドーニ 伝統 革新 歴史 古代

## 1. 研究開始当初の背景

ゴルドーニがイタリア演劇の改革者であるという認識は、イタリア演劇研究者の間ではすでに共通認識として定着している。私自身も、博士學位論文『ゴルドーニの演劇改革～同時代人の批評を通して～』(2005年、東京大学)で、ゴルドーニがその演劇作品の革新性を同時代人から批判されながらも、改革を成し遂げていった実態を分析した。だが近年、過去には研究対象とされなかったゴルドーニのオペラ台本も、批評校訂版が編纂されたことにより緻密な研究を進めることが可能となった。そしてゴルドーニが本格的な喜劇や悲喜劇といった演劇作品を発表する以前に、オペラの台本作家として活動した劇作家としての修行時代の重要性が研究者の間で認識されるようになった。2015年開催の学会 *Goldoni 《Avant la lettre》: esperienze teatrali pregoldoniane (1650-1750)* (「ゴルドーニが《出来上がるまで》: 彼がゴルドーニになる以前の演劇体験」)では、ゴルドーニに先行する作家たちの、彼の作品への影響がテーマとして論じられ、論集も刊行された (lineadacqua, Venezia, 2015)。私自身も論考「ゴルドーニとオペラ・セーリアメタスタジオ作品との関係を中心に」(『東京藝術大学音楽学部紀要』第44号、2019年)において、その影響を分析し、ゴルドーニがメタスタジオのオペラ台本の要素を自らのオペラ・セーリア台本や後の喜劇作品にどのように生かしたかを論じた。だがゴルドーニの作品がその他の先行作家たちから受けた影響に関する研究者達の探求は始まったばかりであり、特にメタスタジオ以外の劇作家がゴルドーニ作品へ与えた影響を探る研究は少数である。そのためゴルドーニに先行する演劇作品やオペラ台本とゴルドーニ作品との関係についての研究を発展させていく必要があった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ゴルドーニの演劇およびオペラ台本を分野横断的に分析し、作品に見られる「伝統性」と「革新性」に着目しながら、劇場の座付き作家として演劇改革を目指すゴルドーニが、劇場の観客に対し、どのように戦略的にそれらを用いたのかを捉えようとするものである。ゴルドーニは、フランスのヴォルテールやディドロといった啓蒙思想家の劇作や演劇論にまで影響を与えた、18世紀ヨーロッパ演劇の要となる作家である。彼の約200作の劇作品がヨーロッパ演劇および文学に与えた影響は多大であった。そのためゴルドーニ作品の研究は、イタリアだけではなくヨーロッパの文学及び演劇研究の基礎となる。本研究は、ゴルドーニが演劇改革を成功に導くために、伝統的な要素と革新的な要素を上演においてどのように戦略的に活用したのかを探る。上演を軸とする現実的な視点から彼の演劇改革を再考することで、従来のゴルドーニ研究、引いてはイタリア演劇研究に一石を投じることを目指すものである。

## 3. 研究の方法

最新の研究成果を取り入れながら、ゴルドーニの演劇およびオペラ台本を調査し、先行する作家たちからの影響について分析した。

ゴルドーニに先行する、または彼と同時代のオペラ台本で、ゴルドーニ作品と同主題で書かれた作品を調査し、ゴルドーニの作品と比較した。そして各作品にゴルドーニ作品との共通点が見られないかを探ることで、ゴルドーニ作品の伝統的要素と革新的要素を分析した。

ゴルドーニ作品の文体に見られる伝統的要素と革新的要素について調査した。

異郷をテーマとしたゴルドーニのオペラ台本と演劇作品を取り上げ、そこに歴史資料を典拠とした形跡は見られないかを探ることを通し、作品に見られる伝統的要素と革新的要素を考察した。

## 4. 研究成果

研究成果を、研究方法による以下の3つの区分により記す。

### 伝統的テーマの作品に革新的内容を盛り込む手法

ゴルドーニと同じ主題で過去に書かれた作品とゴルドーニの作品に共通する要素、異なる要素を分析することにより、ゴルドーニ作品がどの点で伝統的なのか、もしくは革新的なのかを探った。たとえば、古代のアレクサンドロス大王となったペルシア王女スタティーラは、数々のオペラ作品で取り上げられており、ゴルドーニも1741年にオペラ・セーリアの台本『スタティーラ』を執筆している。本研究ではゴルドーニ以前のオペラ台本のスタティーラ像と、ゴルドーニの主人公を比較分析することを通して、彼がこのオペラで、他とは異なるどのようなスタティーラ像を描こうとしていたのか、さらに作品に彼の演劇改革の理念がどのような形で表れているのかを探った。その結果ゴルドーニは、従来のオペラに見られるような明らかに虚構の存在である高徳な人物ではなく、むしろ徳に欠けた不完全な人物を描くことで、後の喜劇で描くこととなる「世によく見られるような」人物造型の手法を、すでに模索していたこと、新たな演劇改革の理念を早くも実現しようとしていたことが分かった。そのため、作品は内容的にはむしろ革新的

な要素が色濃く見られるが、反面、伝統的にオペラの中で描かれてきた人物を主人公としている点で、観客にとっては受け入れやすかったと思われる。このように、ゴルドーニは伝統的な主題ながら内容は革新的な、バランスの取れた作品を生み出すことで、観客を惹きつけようとしたことが分かった。

#### 散文と韻文による台詞劇の制作

ゴルドーニは、散文による喜劇の創作を唱え、そうして書かれた散文喜劇で成功を収めている。一方で、彼はマルテッリアーノという韻文詩形を用いた作品も執筆し、大きな成功を収めている。ゴルドーニは俳優にとって無韻詩行よりも覚えやすく、また押韻により音楽性が高く、オペラに親しんだヴェネツィアの観客にも受け入れ易かったマルテッリアーノを採用したのであった。マルテッリアーノは、中世に用いられた7音節詩行二つの組み合わせによる14音節詩行で、ゴルドーニに先行する時代の悲劇作家ピエール・ヤーコポ・マルテッロが復活させ、当時一般的だった11音節詩行に代わるものとして新たに提唱した詩形だった。ゴルドーニは、一方で人々に親しみやすい散文で喜劇を書き、一方で実際には古いが新鮮に思われるマルテッリアーノ詩形を用いることで、散文を好む観客と韻文を好む観客の両方を引きつける手法を用いていた。

#### 歴史資料の活用

異郷をテーマとしたゴルドーニのオペラ台本と演劇作品を取り上げ、その典拠とされた歴史資料を調査した。その結果、それぞれに見られる異郷の登場人物の形成に、古代及び同時代の歴史資料が使用されていることが分かった。ゴルドーニは古代の資料に描かれた伝統的な異邦人の姿、あるいは同時代の資料に描かれた新しい異邦人の姿を登場人物のモデルとすることで、ヴェネツィアの観客が一般的に抱いているイメージ通りの異邦人像を作り上げ、それにより観客の期待に応えていった。

ゴルドーニは、作品の主題、内容、文体、典拠とする資料と、各部分で伝統的な要素と革新的な要素を混ぜ合わせながら、個々の作品、あるいは自身の作品全体をバランスの良いものとする工夫を惜しまなかった。そうした工夫によって、幅広い観客を引きつけようとしていたことが分かった。

以上の研究成果は、学会発表、講演会、論文や記事、著書を通じ、国内外に広く公表した。特に2022年に出版した単著『啓蒙期イタリアの演劇改革 ゴルドーニの場合』(東京藝術大学出版会)は、ゴルドーニの演劇改革について本格的に論じたおそらく日本初の書であったが、これにより AICT 演劇評論賞と河竹賞奨励賞という重要な演劇賞を二つ受賞する栄誉に与ることができた。イタリア演劇を、日本社会に広く認知してもらうきっかけを作れたものと自負している。また、2023年に森佳子と共編で共著『バロック・オペラとギリシア古典』(論創社)を出版したが、これは伊・独・露・英・仏の各国のオペラ研究に携わる文学研究者と音楽研究者による論集である。これにより今まで光が当たることのなかった18世紀のオペラに見られるギリシア古典の影響を分野横断的、国境横断的に幅広く論じた研究成果を、社会に還元することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 45
2. 論文標題 ゴルドーニの『スタティエラ』 演劇改革の萌芽	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地中海学研究	6. 最初と最後の頁 91 - 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 37
2. 論文標題 (書評) 松田聡『モーツァルトのオペラ 全21作品の解説』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本18世紀学会年報	6. 最初と最後の頁 34 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 コンメディア・デッラルテとは？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 りゅーとびあ×世田谷パブリックシアター『住所まちがい』公演パンフレット	6. 最初と最後の頁 40 - 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 イタリア演劇のキーワード	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 りゅーとびあ×世田谷パブリックシアター『住所まちがい』公演パンフレット	6. 最初と最後の頁 45 - 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 イタリア演劇小史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 りゅーとぴあ x 世田谷パブリックシアター 『住所まちがい』公演パンフレット	6. 最初と最後の頁 50 - 57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 75
2. 論文標題 (新刊紹介) 丸本隆・嶋内博愛・添田里子・森佳子編 『パリ・オペラ座とグランド・オペラ』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 演劇学論集	6. 最初と最後の頁 116 - 117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 821
2. 論文標題 2022年の日本におけるイタリア演劇の上演	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 悲劇喜劇	6. 最初と最後の頁 20 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 オルフェーオをめぐるテキストの変遷 ~ イタリアの演劇作品とオペラ台本を例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 グルック・シンポジウム オペラ《オルフェーオとエウリディーチェ》とその周辺 報告書(早稲田大学総合研究機構オペラ/音楽劇研究所)	6. 最初と最後の頁 10 - 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 COVID-19影響下の舞台芸術と文化政策：欧米圏の場合 -イタリア編	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「COVID-19影響下の舞台芸術と文化政策 欧米圏の場合」報告冊子	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 36
2. 論文標題 イタリア近代演劇と上演空間 -ヴェネツィアの劇場とゴルドーニ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本18世紀学会年報	6. 最初と最後の頁 11-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 パオロ・グラッシ ~文化芸術の“演出家”~	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ベルカントオペラフェスティバル・イン・ジャパン2021(藤原歌劇団×ヴァッレ・ディトリア音楽祭提携)プログラム	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 -
2. 論文標題 Reality and Fiction in the Works of Goldoni: Focusing on the Theme of War	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Acte du Congrès de la SJEDS2015(JSECS)	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 59
2. 論文標題 (書評)アルフィエーリ悲劇選 フィリッポ サウル ヴィットーリオ・アルフィエーリ著 菅野類訳	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日伊文化研究	6. 最初と最後の頁 116-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤倫, 萩原健, 藤井慎太郎, 田尻陽一, 戸谷陽子, 大崎さやの, 辻佐保子, 田中里奈	4. 巻 -
2. 論文標題 特別研究2「COVID-19影響下の舞台芸術と文化政策 欧米圏の場合」報告書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 20
2. 論文標題 報告-1. マルテッリアーノ詩形と演劇の音楽性 ゴルドーニによるマルテッリアーノ使用をめぐって 大崎さやの(『演劇と音楽』シンポジウム:研究手法の視点から) 西洋比較演劇研究会 例会記録と 報告 2020年度(2020年4月~2021年3月)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋比較演劇研究	6. 最初と最後の頁 36 - 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7141/ctr.20.28	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 4
2. 論文標題 新たなエウリディーチェの創造 -カルツァビージの作劇法をめぐって-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 早稲田大学オペラ/音楽劇研究	6. 最初と最後の頁 3 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 446
2. 論文標題 COVID-19影響下におけるイタリアの舞台芸術	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地中海学会月報	6. 最初と最後の頁 6 - 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 1
2. 論文標題 パンタローネからドン・パスクワレへ ~ヴェネツィアの演劇とオペラに見られる「主人役」の系譜	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 新国立劇場 2023/2024シーズンオペラ ガエターノ・ドニゼッティ《ドン・パスクワレ》公演プログラム	6. 最初と最後の頁 28 - 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大崎さやの	4. 巻 22
2. 論文標題 合評会 大崎さやの著『啓蒙期イタリアの演劇改革 - ゴルドーニの場合』(東京藝術大学出版会、2022年) 報告書	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋比較演劇研究	6. 最初と最後の頁 68 - 77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7141/ctr.22.46	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 啓蒙期イタリアの演劇改革 - ゴルドーニの例を中心に
3. 学会等名 イタリア研究会第496回例会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 ゴルドーニの作劇における歴史資料の活用について
3. 学会等名 第12回イタリア史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 オルフェオをめぐるテキストの変遷 ～イタリアの演劇作品とオペラ台本を例に
3. 学会等名 グルック・シンポジウム オペラ《オルフェオとエウリディーチェ》とその周辺（早稲田大学総合研究機構オペラ/音楽劇研究所）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 フランス演劇とゴルドーニ
3. 学会等名 日仏演劇協会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 ゴルドーニの『スタティーラ』 演劇改革の萌芽
3. 学会等名 地中海学会研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 ゴルドー二作品に見られる異邦人の表象 東方を舞台とした作品を中心に
3. 学会等名 早稲田大学総合研究機構 オペラ / 音楽劇研究所7月研究例会 (第196回オペラ研究会) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 18世紀におけるダンテ批評ーヴェネツィアの文人達とダンテ
3. 学会等名 イタリア学会2021 国際ダンテ・シンポジウム 今、ダンテを問う 詩人没後七〇〇年・学会創立七〇年を記念して (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 崇高論とダンテ～18世紀におけるヴェネツィアとイギリスの関係から～
3. 学会等名 二期会イタリア歌曲研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 COVID-19影響下におけるイタリアの舞台芸術 演劇とオペラの場合
3. 学会等名 地中海学会第45回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 マルテッリアーノ詩形と演劇の音楽性      ゴルドーニによるマルテッリアーノ使用をめぐって
3. 学会等名 『演劇と音楽』シンポジウム：研究手法の視点から（西洋比較演劇研究会8月例会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 COVID-19影響下の舞台芸術と文化政策 欧米圏の場合：イタリア編
3. 学会等名 「COVID-19影響下の舞台芸術と文化政策 欧米圏の場合」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 ゴルドーニと被征服民 -南米を扱った二作品を例に-
3. 学会等名 日本18世紀学会第45回大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Sayano Osaki
2. 発表標題 Goldoni 's works and its historical sources: using descriptions of Asians as a clue
3. 学会等名 16th International Congress for Eighteenth-Century Studies (University of Rome) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 合評会 大崎さやの著『啓蒙期イタリアの演劇改革 - ゴルドーニの場合』(東京藝術大学出版会)
3. 学会等名 西洋比較演劇研究会11月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 合評会 大崎さやの著『啓蒙期イタリアの演劇改革 - ゴルドーニの場合』(東京藝術大学出版会)
3. 学会等名 東京大学文学部南欧語南欧文学科主催 イタリア文学関連書籍 オンライン合評会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎さやの
2. 発表標題 シアター・クリティック・ナウ2023 新しいメディアと演劇
3. 学会等名 第28回国際演劇評論家協会(AICT)演劇評論賞受賞記念シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大崎さやの(共編著)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典	

1. 著者名 大崎さやの	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京藝術大学出版会	5. 総ページ数 356
3. 書名 啓蒙期イタリアの演劇改革 – ゴルドーニの場合	

1. 著者名 森佳子、奥香織、新沼智之、萩原健、大崎さやの、村島彩加、藤原麻優子、小菅隼人、中野正昭、赤井朋子、辻佐保子、田中里奈	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 304
3. 書名 演劇と音楽	

1. 著者名 大崎さやの、森佳子（編著者）、辻昌宏、大河内文恵、森本頼子、吉江秀和（著者）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 208
3. 書名 バロック・オペラとギリシア古典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------